

# 青空図書館

活字、映像 etc...  
BE-PAL 世界の住人なら  
ピン/ とくる、珠玉の作品群を  
まとめてご紹介



## 虫を食べるといふことは 野生を食べることなのだ



**野中健一さん**  
1964年生まれ。立教大学教授(地理学、生態人類学、民族生物学)。著書『民族昆虫学』(東京大学出版会)。祖父は岐阜県東濃地方のヘボ採り名人。「虫食む」家庭で育つ。

昆虫食と聞いて、何を思い浮かべるだろうか。  
食料の乏しい山間地域の貴重なタンパク源？  
世界の食料危機を救う夢の新材料？  
たしかにそうかもしれない。しかし、この本の著者・野中健一さんは、そうした従来の昆虫食観に疑問を投げかける。「アフリカや東南アジアなど、さまざまな土地で昆虫を食べる人たちに会ってききましたが、必ずしもほかに食べるものがないわけではないんです。おいしいから、みな食べたくて食べてい

ます。食料危機についていえば、これまで世界の人々が食べていたのと同程度のタンパク質を昆虫からとろうとしたら、とてつもない量になってしまいうでしょう。だから危機を救うといつてもよいものかどうか……」  
野中さんは、これまで世界や日本で50種類以上の虫を食べてきた。  
たとえば、カラハリ砂漠のシロアリや南アフリカ共和国のモバニムシ(イモムシ)やカメムシ、バッタ。  
ラオスのフンチュウやココロギ、ツムギアリ。

そのほとんどは現地の人といつしよに採りに出かけ、その場で食べたりの、ともに調理をして食べている。  
カラハリ砂漠では、現地のサン族でさえ最近あまり食べないというバッタまで食べ、「過酷なときをやり過ごせる男」というニックネームを得ることもあった。  
こうした文字どおり体を張った旅を通して、野中さんは昆虫食からもう少しちがった意味を見いだしている。  
たとえばラオスでのこと。  
かの地は、東南アジアのなかでも昆虫食がさかんな国で、農村の人たちは、稲作の合間をみて、田んぼの周辺で虫をとる。とった虫は自分たちで食べるだけでなく、市場へも出す。だからラオスでは都市に住む人たちも日常的に虫を食べることができる。肉に比べて価格は安くないが、虫は人気があるそうだ。  
「なぜ、そんなに虫を食べるんですか、と現地の人に聞くと、みんな、野生のものをとり入れたいから」といいます。タンパク質とか栄養がどうこうというよりは、自然のものを食べるのが体にいい、楽しいと感じているようなんです。」  
こうした気持ちは、かつての

日本にもあったのだろうか。いや、都市化が行き着くところまで行ってしまった今の日本のほうが野生を欲する気持ちは強いかもしれない。  
たとえば、野中さんは本のおかげで、岐阜県恵那市串原の「串原ヘボ愛好会」の活動をリポートしている。

ヘボとはクロスズメバチのこととで、幼虫・サナギは「ハチの子」として食用になる。信州の名物として有名なあれだ。  
串原ではヘボを採取するだけでなく、資源保護のため飼育に力を入れている。そして、育てた巣のコンテストや試食会を開き、地域おこしにも役立てているそう。

この本がひとつのきっかけとなって、日本の昆虫食もだんだんと見直されてくるのではないだろうか。

### 虫食む人々の暮らし

野中健一著  
NHKブックス  
¥1,019

